

みずきの花

匂うとき

石松愛弘
高村美智子



みずきの花匂うとき

発行

昭和53年10月16日・第1刷発行

著者

石松愛弘

高村美智子

発行者

中須幹夫

発行所

全国朝日放送株式会社

〒106 東京都港区六本木六丁目四番十号

電話・(東京)〇三―四〇五―三七八七

振替・東京七―五二五三番

印刷・製本

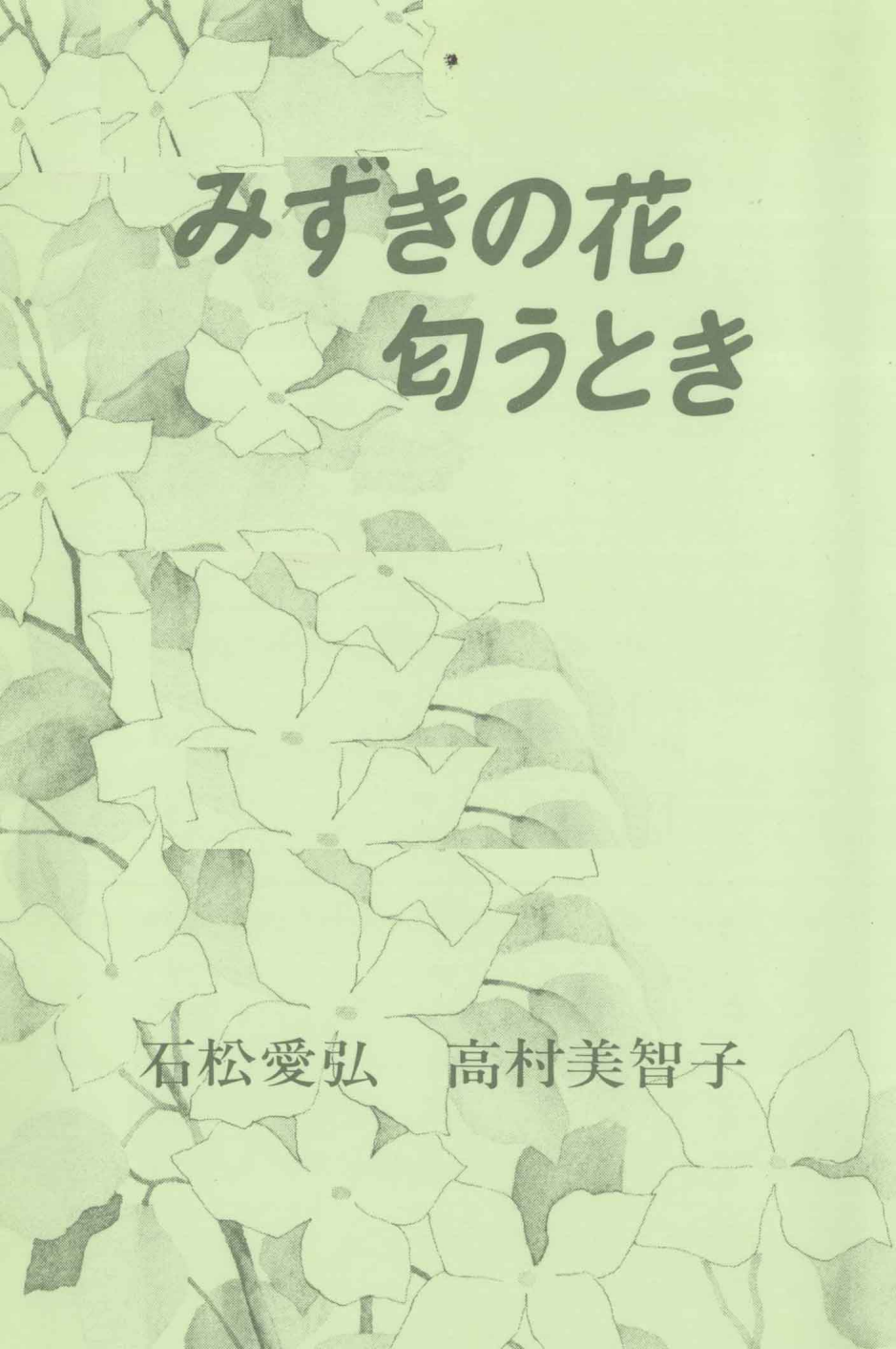
凸版印刷株式会社

定価

八五〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

© Yoshihiro Ishimatsu, Michiko Takamura 1978



みずきの花 匂うとき

石松愛弘 高村美智子

みずきの花匂うとき・目次

目次

第一章

“湖を渡るアヴェ・マリア”……………9

第二章

軽井沢の午後……………31

第三章

花みずき……………63

第四章

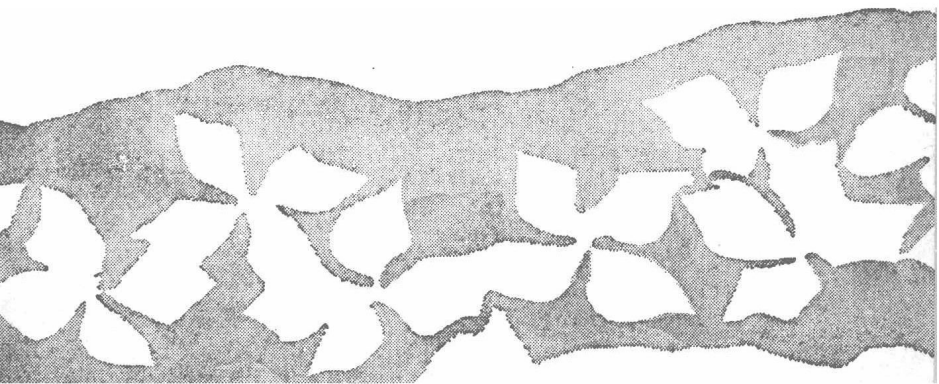
自殺のこと……………81

第五章

落馬した少年……………97

第六章

真夜中の言葉……………119



第七章

落ちたカフスボタン……………135

第八章

妻の時間……………155

第九章

細長い茶色の封筒の中……………171

第十章

抱擁……………191

第十一章

それぞれの冬……………209

第十二章

死の前後……………223

第十三章

やがてまた花みずきが……………237



カバ ー 絵
本文イラスト

西島
節

みずきの花匂うとき

この作品は

石松愛弘の原案をもとに
高村美智子が小説化したものである。

第一章 “湖を渡るアヴェ・マリア”

いつの間にか外は雨になっていた。

宵闇に濃いシルエットで建ち並ぶビルの窓に雨脚を見せる灯は、もうすっかり秋の色である。

その雨を、睦子は高杉工機の役員室の窓に立って見ていた。

常務の高杉は珍らしくプライベートな休暇をとって関西方面へ旅行しており、彼の秘書をしている睦子にとって、今日は久しぶりに暇な一日だった。

こんな日こそ早く帰ってゆっくり休むとか、忙しさにまぎれてためてある小さな用でも片付ければいいと自分でも思いながら、彼女はその場を立ち去りかねていた。

——マンションに帰っても誰も待っていない——

いつも当り前に思っていることが、なぜか今日は胸に重く澱んでいる。

灰色の階段を上り、鉄のドアの前に立って鍵を開ける瞬間、それを引延ばしたくてここ

に立っているのではないかと、睦子は自分の心を瞞めるように灯の中に降る雨に目を当てていた。

野村睦子が、耕作機械では業界第一の大手メーカー、高杉工機に入ったのは、今から十四年前、短大の英文科を卒業した春だった。

高校二年の時父を、そしてその翌年母を病で失っていた睦子は、当時すでに結婚していた兄の友彦のもとに身を寄せて学校に通い、やがて就職したのだった。

友彦は二流の国立大学を出たサラリーマンで、真面目な心優しい男だった。嫂あにょうの和子も気はあまりきく方ではなかったが温和な性格で、たて続けに両親を失った義妹の睦子になにかといたわりをみせてくれた。

入社四年目で、高杉の秘書に拔擢ぼつてきされ、それから二年ほどした時、睦子は兄の家を出る決心をした。

兄たちの子供は当時二人いて、手のかかる盛りだったし、秘書という仕事の性格上、帰宅時間も以前のように予測が立たなくて、和子になにかと負担が多くなったのが、心苦しかったためだった。和子が、遅く帰った睦子のために食事を温め直したり、風呂に入るのを待ってくれたりするのが辛かった。

——あの頃は若かった——

と睦子は思う。

はじめての一人暮らしは、睦子にとって、寂しいとか恐いとかいう気持ち以上に、なにか新鮮で夢があった。

両親が睦子の結婚のためにと積み立てておいてくれたものを頭金に、中古のマンションを手に入れた睦子は、ここにいつか迎える日があるかもしれない一人の青年を秘かに夢見ていたのではなかったか？

それは現実にいる男ではなく、童話の中にある白馬の騎士のように、どこからともなくやって来て、自分を幸せにしてくれる青年だった。

睦子はつましい生活の中でやりくりして可愛らしい台所用品や食器をこまごまと揃え、雑誌についている料理のカードを集めたりした。

しかし、セットの食器も、色彩のよいカードの料理も、遂に睦子のテーブルに載ることもなく、いつか十年の月日が流れてしまった。

機会がなかった、と言えば嘘になる。

幾つかの小さな恋。そして高杉の亡った妻の邦子が世話してくれた縁談。それから、結婚を約束して三年以上もつき合った営業部の平井とのこと。

自分の部屋に招いた男は平井だけだった。

七年前のことである。

当時の睦子は、そろそろ適齢期をすぎているが、不思議なほど結婚に対する焦りはなかった。

睦子が秘書をしている常務の高杉晃一郎は、高杉工機の創始者の一人息子で、十七歳の時父を失い、名門から嫁いで来た勝気な母のたきの手によって育てられた。大学を出て二年ほど西ドイツへ留学し、帰国後数年して高級官僚の娘、石井邦子と見合い結婚をした。

彼にはすでに社長の座は約束され、現在でも高杉工機第一の実力者だった。

睦子にとっての日々の幸福とは、自分の手によって確実に進められていく仕事の手ごたえだった。

高杉に代って郵便物に目を通す。新聞をスクラップし、訪問や接待の予約をする。様々な予定を緻密なスケジュール表に作り上げ、高杉の時間が滞りなく、そして無駄なく進められていくように配慮する。睦子は、自分で工夫した独得のスケジュール表を眺め、高杉の行動をきちんと掌握し、自分に与えられた仕事を過不足なくこなしていくことに打ち込んでいた。

彼女の日常はすべて仕事に向って整えられ、たとえ平井とのことでも、それが乱されることは耐えがたいのだった。

仕事熱心、と言うことだったのだろうか？

——わからない……——

睦子はそう思う。

確かに仕事に打ち込んではいた。

だからと言って、さしのべられた平井の腕の中に飛び込んでいけないほど仕事が大きく

見えていたのかどうか。

若くて、有能で、自分を愛し、一生の安定を保証してくれる男と引き替えにするほど、睦子は自分の仕事に価値を見出していたのだろうか。

「まるで常務のリモコンつきだな」

ある夜、六本木のスナックでやっと落ち合って遅い夕食を共にしようとした矢先、高杉から急ぎの書類を家まで届けて欲しいと電話がかかって来た時、平井は慥然として呟いた。どんな時にも自分の行先を高杉に連絡してあることが、次第にやりきれなくなっていた頃だった。

「ごめんなさい。でも……」

「会社を辞める気にはなれないんだね」

「それは……。いつかは辞めなくてはならないわね」

「いつか、か？」

ぽつんと言って平井はそれきり口をつぐんだ。

睦子の心を計りかねて、平井は苦しんでいた。

美しくて、有能で、万事そつなくやりこなしている睦子だったが、同年に入社した他のOLたちは殆ど結婚して退社し、彼女を追っていると噂された若い社員たちの話も最近ではあまり耳にしなくなっていた。

高杉をはじめ社長も、他の重役達も、睦子を大切にしていた。

しかし、彼女が自分の一生をどう考えているのか、平井はそれが掴めなかった。

睦子を真剣に愛している平井にとって、睦子が時折見せる半ば疲れたような、戸惑うような表情は彼の心を苦しく苛立たせた。

「まだいらしたんですか」

ふいに背後からかけられた声で、睦子は、はっとして振り返った。

ビルの警備をしている若いガードマンだった。

「今日は常務がお出かだと聞いたものですから。もうどなたもいらっしゃらないと思って」

「ええ。私も帰ろうと思っていたところ。雨が降って来たわね」

「はあ……」

なに気なく睦子のかける言葉に、ガードマンは眩しげな目になってうなづいた。

「ごめんなさい。もう帰ります」

——先刻からどのくらい時間が経ったのかしら——

睦子はぼんやりそう思いながら役員室を出てエレベーターのボタンを押していた。

——あと何年、このエレベーターでビルを昇り降りするのかしら——

無人のエレベーターの中がなにか胸苦しくて睦子のため息をついた。

——どうかしている、今日は……——

疲れるはずもない一日だったのに、と睦子はそう思った。

二日後、高杉が関西から帰って睦子は、また忙しい日常に振りまわされはじめていた。雨の日の憂鬱だった気分は仕事の忙しさの中で消えていた。

高杉の留守中にたまっていた用が一通り片付いたのはもう昼に近かった。

「なにかお土産と思ったけれど、女のひとのものはわからなくてね」

言いながら高杉は薄い一冊の画集を出した。

「神戸で展覧会をやっていた。セガンティーニ。あれだけ集めて見せるのは珍しいので見て来たんだよ」

睦子は、高杉がさし出した画集を受け取らされて胸もとに捧げるように持ったまま、彼の顔を見た。

「君、いつだったか画を描くって言っていたから。好きかどうかわからないけれど買って来た」

「まあ……。ありがとうございます」

深々と頭を下げる睦子に軽くなづくと、高杉は人と約束した昼食をとるため部屋を出ていった。

高杉を玄関まで送り机に戻った睦子は、そっと画集を拡げて見た。

セガンティーニは十九世紀半ばのイタリアの画家で、初期の作品は、フランスのミレー